

開会の挨拶

淡 路 敏 之（京都大学理事・副学長／教育担当）

東北地方・太平洋沖地震直後の時期に、また年度末のご多忙の折に、京都までお出でいただき感謝申し上げます。本学も現在、被災地域からの入学生に対して、入学手続きの期限をどうするか、今後どのようにサポートするか等といった対応や、さらに原子力発電の問題が重なり、東京で予定されていた催しの相当数が京都開催に変更要請されるなど、多忙な状況にあります。加えて、本日の午前には本学医学部人間健康学科のFDがあり、2時間程度出向いて今しがた戻ってきたところ、急用が入ったものですから、出席が遅れ大変失礼いたしました。伏しておわびをいたします。

本FDフォーラムはソフト・ハードの両面において、日本のコアとしての役割を担っていると聞いております。これもひとえに皆さま方のご尽力によるものと考えます。中教審や日本学術会議の答申等でも指摘されていますように、変革期の社会にあって、国際通用性のある、専門力を生かせる総合力育成の教育の充実に、文部科学省等も大きな関心を抱いていますし、京都大学も実践していきたいと思っています。

このような貴重な機会に、全国の皆さま方の成功例、あるいは今後に向けた課題などを共有し、有意義なシンポジウムとなることを祈念しております。どうかよろしくお願いいたします（拍手）。

（大塚） 淡路先生、どうもありがとうございました。

シンポジウム「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」

司会 大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

（大塚） それでは、元気を出してシンポジウムの方を始めたいと思います。シンポジウムは私、大塚とセンターの松下の方で進行を務めさせていただきます。前半は松下の方で進行を担当いたしますので、バトンタッチしたいと思います。

（松下） よろしく申し上げます。例年ですと、このシンポジウムに先立って基調講演を設けていました。しかし今年は「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」というテーマで5人の方にご報告いただき、フロアの皆さまも含めて時間をかけてじっくり議論を深めたいということで、あえて基調講演は設けませんでした。

本日ご報告いただくのは、大学評価・学位授与機構の森利枝先生、本センター准教授の溝上慎一、本学医学研究科医学教育推進センターの森本剛先生、広島大学大学院工学研究院の伊藤浩行先生、それから、創価大学教務部課長の澤登秀雄さんです。よろしくお願いいたします（拍手）。

京都大学は、自由の学風、あるいは自学自習を理念としていまして、私の学生のころは、文学部などは5月の連休明けに授業が始まって、6月中には終わるといわれていたくらいなのですが、さすがに最近は、わが京都大学でも「単位制度の実質化」というフレーズを耳にするようになってきました。単位制度の実質化については、半期15コマあるいは16コマを必ず確保するようにいわれている大学も多いのではないかと思います。それに対して、大学教員がさまざまな仕事で非常に忙しくなっている中で授業を15回必ず確保することは難しい、というような声も聞かれます。

それから、皆さまもご存じのように1単位は45時間の学修をもって1単位とみなされているわけですが、実際に15回の授業を確保しても、授業外学習を何もしていなければ実質化はしていないわけです。その授業外学習のことをなおざりにしたまま、15回の授業だけを確保するというのが先走りしているという実態もあります。

そこで、今回は「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」というテーマを掲げまして、まず森先生の方から、なぜ単位制度はこのような形になっているのか、そもそも単位とはどういうものなのかというお話をしていただきます。特に今、学習成果が求められる中で、単位制度というものは時間によって学習を測っているわけで、その妥当性についてお話していただきたいと思っています。

それから、本センターの溝上からは、授業外学習や自学を学生がどのようにやっているのか、それによって学生の成長がどのように変わってくるのかということをお話しする予定です。

その2人のご報告が終わったところで休憩を取ります。本日は後ほど皆さまに質問票をお渡ししますが、一番上に、どの報告者に対して質問したいかということ丸で囲んでいただくようになっています。複数に質問されたいときは、質問者にうまく渡すために、ご面倒だとは思いますが1枚ずつ紙を変えて質問をお書きください。全員に質問なされたいときは「全員」という欄もありますので、そこに印を付けていただければと思います。

その後、今度は森本先生、伊藤先生、それから澤登さんという形で、現在の単位制度の中でも、どのくらいの工夫ができるのかということについてご報告いただきます。医学部は少し特殊な制度の下でカリキュラムが運営されています。ただし、その考え方は医学部以外の学部のカリキュラムを考える上でもとても有益な示唆を与えるものと思われるので、森本先生から本学の医学部のカリキュラムについて話していただきます。そして伊藤先生からは広島大学、澤登さんからは創価大学での工夫の在り方について話していただく予定です。伊藤先生からは、1週間に2回同じ授業科目の授業をすることで学生の成長はどのように変わってくるのか、澤登さんからは、学習のコミュニティを作っていくことによって学習時間を確保していくというようなことについてご報告いただく予定です。

事前の打ち合わせでは、今回の登壇者の方々は40代で、まさに大学、あるいは研究機関の中堅を担っていらっしゃる方々で、皆さんを「さん」付けで呼びたいということになっていたのですが、すみません、私の習慣で先生と言ってしまいました。これからなるべく「さん」付けで通したいと思います。

それでは、まず森利枝さんからご講演をいただきます。簡単にご紹介をしたいと思います。森利枝さんは早稲田大学の大学院を修了された後、大学評価・学位授与機構で助手、助教授を務められまして、現在は准教授でいらっしゃいます。2004年にはニューイングランド大学協会およびボストンカレッジの客員研究員もなさっています。それでは、森さん、どうぞよろしくお願いいたします。